

## 読み軽視の国語教育

「悪平等の弊」は、国語教育そのものにも及んでいる。戦前の国語教育は、「読み重視」の教育であって、教科書の名前も“読本”であったし、教科名も“読み方”であった(書き方・話し方という教科名もあったが、話し方は低学年にはなく、高学年でも週にわずか一時間しかなかった。書き方は全学年を通じてあったが、週に一時間、多くて二時間であった。それに引きかえ、読み方は全学年を通じ、毎日あった)。

戦後、アメリカの教育の影響を受け、“話す・聞く・読む・書く”という四つの学習活動を並列させ、特に“話す”学習に重点を置くように変えられた。

アメリカは多民族から成る国であり、それぞれの家庭ではいろいろな言語が語られている。だから、どうしても共通語である英語を“話す”教育に力を入れる必要がある。

しかし、一民族一言語のわが国では、“話す”教育に力を入れなければならない理由がない。それにもかかわらず、話す教育に力を入れるように改め、その分“読む”“書く”教育が疎かになった。

これは、わが国特有の、“猿真似”による弊とも見えるが、その根底には「悪平等」の教育観が潜んでいる、と見てよい。つまり、“話す・聞く・読む・書く”という四つの学習活動を平等に見て、これを平等に扱い、“読む”ことが“話す”“聞く”“書く”能力を育てる原動力であるとい

う戦前の“読み方”重視の教育を、偏重教育と考えたものである。

人は五官を通じて外界から知識を吸収しているのであるが、調査によれば、“読む”ことによって得るものが83パーセント、“聞く”ことによって得るものが11パーセント、その他が6パーセント、という比率になっている、ということである。

また、人によって記憶の仕方に、視覚型優位のものと聴覚型優位のものとがあるが、一般的には“視覚”による記憶の方が強く残ると言われていて、“読む”ことによって得る知識の方が、“聞く”ことによって得た知識よりも、記憶の保持率が高く、正確であることが定説になっている。

だから、“話す”“聞く”能力の根底にある語彙力を養うのには、“話す”“聞く”学習をすることよりも、むしろ、“読む”学習をすることによって養う方が有効なのである。

話すテクニックがどんなに巧みであっても、内容の貧弱な話では、誰も耳を傾けようとはしないものである。反対に、内容の充実した話なら、話し方はどんなに下手であろうとも、喜んで耳を傾けるに違いない。

“話す”技術は、“話す”ことによって磨かれるが、内容を高めることは不可能である。内容を高めるには“読む”ことを重ねるよりほかはない。戦前低学年では“読み方”学習ばかりして、“話し方”がなかった

ゆえん  
所以である。